

# 桜と日章 掌編

神家正成



前々作『深山の桜』と前作『七四』も、宝島社文庫から好評発売中です。同一の世界観の物語で幾人か同じ登場人物が出てきます。

各作品の作中時間と舞台は、『深山の桜』が、2014年2月、アフリカ南スーダンで国際連合平和維持活動中の自衛隊宿営地。『七四』が、2015年3月、静岡県富士学校と東京。『桜と日章』が、2017年4月、千葉県柏市です。

どの作品から読んででも楽しめます。よろしければ読んでみてください。

※ この冊子に収録されている掌編は、『桜と日章』読後に、お楽しみください。

娘とレストランと出会い



「——警部はその際、怪我をして病院に向かわれ、軽傷だから家族には絶対に知らせるなど……」公衆電話の受話器から、警察職員の声が聞えてくる。

私は、ため息をこぼした。

今日は一人娘の小学校入学のお祝いを、家族水入らずで行うはずだった。奮発して予約したそごう柏の回転展望レストランで夫を待っていたが、約束の時間を過ぎてても来ないので心配になって電話をしたら、このさまだ。

千葉県警察の機動隊に所属する夫は、昨年、文民警察官として派遣されたカンボジアから帰国したのち、人が変わった。自分の無力さを嘆くかのように訓練に精を出すようになった。今日も土曜日なのに部下の訓練に付き合っただけの待ち合わせだ。

子連れ男性とすれ違いながら、肩を落とし席に戻る。

先のことを考えると気が重くなる。頼れる親族もいない中、留守がちな夫と娘を育てるのは大変だ。それに夫の仕事には、常に死の影が——。

「ねえ、お母さん、お父さんはまだ来ないの」

窓から柏の風景を眺めていた娘は、夫が来ないと知るとぐずり出した。今日は入学式に参加できそうもない、夫の罪滅ぼしの場だったのだ。

やがて娘は泣き出した。いくらなだめても泣きやまない娘に、母としての自信が揺らぐ。この先、私はこの子をしつかりと育てることができるのだろうか。

急に吐き気が込み上げてきた。慌ててトイレに向かう。涙と共に胃液を吐く。鏡には、やつれた顔が映る。

席に戻ると娘の姿が見えなかった。お気に入りのセーラムーンの人形が、寂しげにたたずんでいる。レストランを一周したが、娘はいなかった。

——あり得ない。ここからはエレベーターでしか降りることができない。従業員に事情を告げ、エレベーターのボタンを押した。

玩具売り場にも、連絡通路でつながるスカイプラザの屋上遊園地にも、子供服売り場にも、娘の姿はなかった。

「義患つ、義患つ」大声で娘の名を叫びながら探す。

失踪、誘拐——。最悪の事態が頭を巡る。私のせいだ。足がもつれ、通路に倒れ込む。先ほど一緒に買った真新しい鉛筆などの文房具が、寂しい音を奏でながら散乱する。

目の前の文房具が、涙でかすむ。

その耳に微かな鐘の音が聞こえ、やがて「イツツ・ア・スモール・ワールド」の曲が聞こえてきた。娘の好きなからくり時計が、刻を告げる音だ。

もしかして——。柏駅につながるダブルデッキまで、階段を駆け足で下りて向かう。そごう柏の壁に掛かる世界の人形時計のからくりを見あげる人の中に、娘が見えた。

近寄り抱きかかえる。娘はきよとんとした顔をする。

「ああ、お母さんですか、良かった。レストランからその子が付いてきて、どこのお子さんかと心配していたのです」

男の子を連れた中年の男が、安心したような声を掛けてきた。

私は何度も頭を下げた。娘と同じ歳くらいの男の子は、私と娘をいつまでも見ている。「信治、行くぞ」男の声に男の子は、私たちに頭をべこりと下げて去っていた。

「お父さんに似ていたの……」言いつくす娘に、思わず手を上げようとしてしまった。体をすくめ肩を震わせる娘を見て、我に返る。寂しいのは私だけではない。父に甘える機会の少ない娘を、私は思いきり抱き締めた。

「おい、どうした、こんなところで」

のんきな夫の声が、降ってきた。

「お父さんっ」娘が叫びながら夫に抱きつく。

夫は娘を抱きかかえながらも、痛めたらしい脇腹を押さえた。急いできたのだろう、春の陽気なのに汗をびっしりとかいている。

私は立ち上がり、夫に詰め寄る。

「あなた——」夫はおびえた顔になる。

「私より先に死んだら、許さないわよ」

夫はおどけたように笑うと、娘を高く掲げた。その上には、春の淡い空が輝いていた。

## 十字架の重み



「どうしても黙秘するのですね」

「アクリル板越しに対面している宮城巖雄三等海佐の声が、刑務所の面会室に響いた。星谷雪江は、首を横に振ることもうなずくこともなく、座ったまま緩やかに息を吐く。「事件に関連したと思われる米軍の軍属は、出国してしもうた。あなたは桜星——日の丸ではなく星条旗に忠誠を誓うのですかい」宮城は大げさに頭をかく。

目の前の男は、自衛隊情報保全隊の所属だ。警察の取り調べても明らかにならなかった一年前の千葉県警察警備部長略取事案の真相を説明しようと、何度もここを訪れてきている。防衛大学の七期後輩と聞いたが、仕事熱心なものだ。海上自衛官の夫とは同じ船に乗っていたことがあるらしく、将来有望な優秀な隊員らしい。

「あなたも……」星谷の声に宮城は手を止めた。

「自衛隊の中樞を歩むつもりなら、選ばなくてはいけない……」

日の丸と星条旗のみならず、個人と組織、私と公、選ぶべき道は多々ある。

宮城は、ため息を一つつくと、こちらを見据えてきた。思いがけず真剣な眼差しだ。「それで先輩は、選んだ道を後悔しておらんですか……。結局はとかげの尻尾を切つて終わらせようとしているのですよ。米軍は……」

宮城の言葉に胸をえぐられる。後悔してないと言えば、嘘になる。

だが、そんな思いは口が裂けても言うことはできない。自分の行動は、誰かが選ばなければいけなかった道だ。誰かが十字架を背負うのであれば、私が背負う。それに多くの犠牲を払ってしまっている。自分が後悔すれば、殉じた多くの者に顔向けできない。

「して……いないわよ」

宮城は鼻の頭をかいた。しばらく面会室の壁を見つめていたが、やがて呟いた。

「小田三曹が、言うちよりました」

思わぬ人物の名に、星谷は唾を飲み込む。

「星谷さんは、組織の醜い部分を一人で背負ってくれたのです。背負わせた自分らが悪いのだと——」

星谷は眼を閉じて、奥歯を静かにかんだ。膝の上に置いた両拳に力が入る。

選ばなかった教え子の言葉が胸に沁みる。とはいえ、小田ではなく太刀岡三等陸曹を選んだのは、太刀岡の父が死んで、親族がいなくなったからだ。親族のいないこと——それが秘中の秘の部隊に選抜する条件であったのだ。ただ、そのことがきっかけで、小田の自衛官人生は大きく変わってしまった。それなのに……。

「それだから、星谷さんの罪は、自分たちの罪なんだと——」

宮城の続いた言葉に、胸が揺さぶられる。

「彼は、ええ先任上級曹長になるでしょう。人の心の痛みが分かる……」

星谷は耳をふさぎたかった。両拳を握って耐える。巻き込んでしまった桑くわ二等空曹の言葉が、思い浮かぶ。

——自分たちは、もう仕方がありません。でもこれ以上同じ思いを、味あう者はおらんでもええ……。だからこそ我々が石になります。星谷さん、その上に立ってください。太刀岡は、「難しいことはよく分かんねえけど、星谷さんのためになら、おらはやるっぺよ……。できるっぺよ」と笑った。

もう一人の辻元つじもと一等海曹も、趣旨を説明したあと力強くうなずいた。

まさか口封じにまで出るとは……。私にまで手を出さないのは、まだ利用価値があると思っっているからなのだろう。三人を死なせたのは、私なのだ。

喉元まで懺悔の言葉と慟哭どうきょがせり上がる。眼を強く閉じ、想いにあらがう。紙のすれる音がした。宮城が何かを取り出した気配がする。

おそろおそろ目を開けた。

アクリル板越しに見えたのは、自分が夫に送った離婚届だった。

「ご主人——星谷二佐は、『いつまでも待つ、諦めない』と——」

実直で誠実な夫の想いに、堪えていた感情のせきが切れる。

目の前の風景が、かすんでゆく——。

個人ではなく組織を選び、十字架を背負う者を、夫は許してくれるのだろうか。「あ、あなた……」声にならぬ言葉が、面会室にこぼれ落ちた。

## ダイヤモンドの輝き



高山浩泰三等陸曹は、目の前を進む教官——飯島良正一等陸尉の戦闘服の背をにらむ。豪雨の中、手に持つ八九式5・56ミリ小銃の銃口をその背中に向けて、引き金に人さし指を掛ける。唾を飲み込んでから静かに引き金を引く——。

カチリと撃鉄の落ちる音がするが、銃口からは水が垂れるだけだ。高山は大きく息を吐く。何をやっているんだ俺は——。

目の前の千葉県警察からの出向者は、昨晚、俺に吐き捨てた。

「君はまだ若い。脱落しても恥ではない。無理をするな」

自衛隊生徒課程を修了してすぐ、俺は地獄のレンジャー訓練に志願した。二十歳の若い肉体が、三十六歳のロートルに敵わないなど思いたくないが、機動隊所属でカンボジアに文民警察官としても派遣された目の前の男に、何とか追いつくので精一杯だった。舌打ちが出る。訓練の総仕上げである不眠不休のこの潜入訓練を終えれば、憧れのダイヤモンドが輝くレンジャー徽章を、手に入れることができる。

雨が滴る八八式鉄帽を被り直し、肩に食い込む重い背囊を背負い直す。ぬかるんだ山道を、戦闘靴を食い込ませるようにして滑らないように慎重に歩を進める。

先頭を進む男の右手が挙がる。小休止だ。分隊員たちはそれぞれ休む場所に散った。

「棄権すべきだ」教官の指示は絶対だ。だが俺は飯島に声を荒らげて逆らった。

「まだ、できます。やらせてくださいっ」両脇の医官と助教が顔をゆがめる。

憔悴しきった上半身を起こして、飯島の目をにらんだ。負けてたまるかっ。

「君はレンジャーの資格が欲しいだけなのかい」飯島の冷やかな声に眉根を寄せる。

「資格はあくまでも後からついてくるものだ。己の精神と身体を鍛錬することが訓練の目的だ。資格が欲しいだけの者は、事に臨んだとき、役に立たない」

半ば凶星の指摘に、体中の血液が沸騰して、冷えきった体を熱くする。

伊達や酔狂でこんな命を削るようなレンジャー課程に志願するわけがない。だが、自分の心の中に、自分を馬鹿にしてきた多くの者を見返してやりたい——という気持ちがないわけではない。飯島だけは、この自分の心の奥底にある醜いおりに気付いている。

俺は八九式5・56ミリ小銃を手に立ち上がった。ろくに食事を摂っていない体が悲鳴を上げるが、奥歯をかみ締めて、全身に気合を入れて吐き捨てた。

「さあ、休憩は終わりです。訓練を続けましょう」

そうは言ったものの、肉体も精神もとうに限界を超えている。前を歩く同期の背中だけを見て、足を何とか進める。すぐ後ろには飯島が付いてきていた。体調の異変を感じたら、すぐさま訓練から外され、レンジャー徽章を付けることなく原隊に戻される。

それだけは嫌だ。俺は小銃を強く握り締め、小石がばらつく細い崖道を歩く。何かが八八式鉄帽に当たった。顔を上げると、巨大な岩が落ちてくるのが見えた——。

雨中に響いた轟音を、俺は、地面に寝転がったまま聞いた。岩石を見ても体が動かなかった。ああ死ぬのかと思った瞬間、後ろから突き飛ばされた。

体を起こし十数メートル下の谷を見る。そこには飯島が倒れていた。手と足があり得ない方向へ曲がっている。医官や助教が、焦った様子でロープを使い崖下に降りてゆく。俺はその風景を呆然と見ていた。雨が頬を叩く。体が一回震えると、わけの分からぬ叫び声が出た。制止する同期を振り切り、崖下に降りた。

医官が忙しなく飯島の体の状況を確認している。助教が救助要請の無線を飛ばす。

「教官っ、飯島教官っ」俺の悲痛な叫び声に、飯島の眼が微かに動いた。

「教官っ、すみませんっ、自分のせいで……」その先が言葉にならない。嗚咽と後悔が口から激しくこぼれ落ちる。

「き……気にするな……」弱々しい声が、雨音にかき消される。俺はにじり寄った。

「強固なダイヤモンドの輝きを、身に付けろ……。頼んだぞ」

飯島の戦闘服の胸に輝くレンジャー徽章が、赤黒い血で染まってゆく。

「つ……妻に伝えてくれ……。約束を守れなくて……。すまないと」

飯島の口から血が吐き出てくる。医官が難しげに首を振った。

「道子……。義患……。すまない……」

飯島の眼が、静かに閉じられる。

俺は叫んだ。絶叫が雨の山中にいつまでも響き渡っていた――。

神家正成（かみや まさなり）

※本書の感想、著者への励ましなどは、下記ウェブサイトやTwitter、  
Facebook、noteまでお気軽にどうぞ。

<https://kamiya-masanari.com/>

[https://twitter.com/Kamiya\\_Masanari](https://twitter.com/Kamiya_Masanari)

<https://www.facebook.com/Kamiya.Masanari>

[https://note.mu/kamiya\\_masanari](https://note.mu/kamiya_masanari)

さくら にっしやう しょうへん  
桜と日章 掌編

2019年 4月10日 第1刷発行

著 者：神家正成

発行人：神家正成

発行所：株式会社神家正成

組 版：株式会社神家正成

印刷・製本：神家正成株式会社

本書の無断転載・複製はご自由にどうぞ。喜びます。

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

© Kamiya Masanari 2019 Printed in Japan

ISBN 978-4-1115-9348-4